ことばの遣い手 第2回

脚本家のことば

「天が呼ぶ　地が呼ぶ　人が呼ぶ　悪を倒せと俺を呼ぶ　俺は正義の戦士　○○○○！」
「ズバッと参上、ズバッと解決！　人呼んで、さすらいのヒーロー　△△△△！」

これは子ども向け特撮ヒーローもののセリフだ。町を壊し市民を蹂躙しつくす悪役。そこに、変身した正義のヒーローがさっそうと登場、ポーズを決めて悪役の前に立ちふさがる…。

ここでヒーローは上記のような名乗りのセリフを吐くのだ。

映画やテレビドラマの台本は、場面の状況を指定する「ト書き」と登場人物の話しことばである「セリフ」で構成される。

ドラマを成立させる要素としては、セリフのほうがより重要であり、脚本家はセリフづくりに最大限の力を注ぐのだという。

セリフの役割には、

①ドラマの進行　②人物の感情表現
③人物の性格表現　④場面･状況の説明

がある。

脚本家は、この役割を常に意識しながら、登場人物のキャラクター、場面や筋書きなどの設定に従って、観客・視聴者の感動を引き出すようなセリフをつむぎだし、構成していくのだ。

それは、小説のような文学作品を創造することとは違う。映画やドラマという、いわば建造物を完成させるための「図面を書く」作業だ。

脚本家は、一つ一つのことばを丹念に選んでセリフに編んでいく、職人のようなものだ。

例えば、自分の呼称を「俺」と「私」など使い分けることで、性格だけでなくそのときの感情なども表せる。また、一つの文を切り分けて、複数の人物に語らせることで、場の緊張感を表したり、ドラマの進行にテンポを生み出せる。

さて、冒頭のセリフ。悪役の暴虐をさんざん見せつけられた子どもたちにとっては、ここからヒーローが大活躍、胸がわくわくする大きな転換点となる場面だ。脚本家も練りに練ってつくったセリフだろう。

ところでこの言い回し、何かに似ていないだろうか…。そう、時代劇によくある言い回しである。

実は、特撮ヒーローものの脚本は、その草創期（1960～70年代）は、時代劇映画の脚本家が書くことが多かったという。そう考えると、ドラマの筋立てや登場人物の設定など時代劇によく似ている。登場するときのポーズは、歌舞伎の見栄そのものだ。五人の戦隊ものの名乗りは白浪五人男だったのか…。

取材協力：稲葉一広（脚本家）